

JAPAN URBAN DESIGN  
INSTITUTE

## 都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷 2-35-10

本郷駒川ビル 113

TELEPHONE 03-3812-6664

FACSIMILE 03-3812-6828

# JUDI NEWS

032 SEPTEMBER 20.  
1996

発行者

都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

- 特集テーマ：臨海副都心の環境デザイン
  - 1. われら自身の黄金の都市 ..... 1
  - 2. 臨海副都心の環境デザイン ..... 4
  - 3. 臨海副都心開発の景観ガイドラインについて ..... 6
  - 4. 東京臨海副都心周辺の風景考 ..... 10
  - 5. 東京臨海副都心の環境デザイン ..... 13

- |                |    |
|----------------|----|
| 6. 臨海副都心のウォーター | 15 |
| フロント開発         |    |
| 委員会活動報告        | 17 |
| ブロック例会レポート     | 17 |
| 事務局より          | 20 |
| 編集後記           | 20 |

## 特集：臨海副都心の環境デザイン

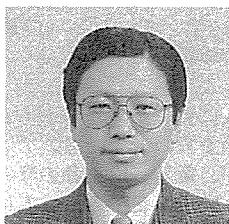
特集

1

### われら自身の 黄金の都市

北原 理雄  
KITAHARA TOSHIRO

千葉大学工学部



#### ■幻想の街 臨海副都心！？

「エラ」、96. 8. 19を見てヤレヤレと思った。これでは一昔前の「ブルータス」だ。

一年前、都市博は中止され、景気回復の兆しは見えなかつた。

皆が臨海副都心開発を失敗と断じ、幽霊都市になると嘆した。

どんてん返しだった。未完成な街が、人々をひきつけたのだ。

まるで自分は「皆」のなかに入っていないような台詞、と感じたのは私だけだろうか。いまに始まつたことではないが、マスコミの辞書には差恥心という言葉がないらしい。

そこへJUDIの原稿依頼が来た。臨海副都心へは、まだ施設がほとんどオープンしていない春先に行つたきり、足を運んでいない。

正直のところ、臨海副都心にはあまり好感を持っていない。バブルの時代から、中央集権構造の乳母日傘のもとで繰り広げられる巨大プロジェクトには辟易していた。イベントやコンベンションにしても、金の力に飽かして一人勝ちをつづけるのは、節度のある者のすることではない。時代劇でいえば、お上を後ろ盾に横車の御用商人。「武蔵屋、お主もあこぎよのう、フフ…」。まあ、田舎者の僻みと言えばそれまでのこと。

しかし、「エラ」のいう「幻想の街」を一度見ておかないと話にならない。そう思つて、9月上旬の日曜日、「ゆりかもめ」に乗つて見物に出かけた。

行ってみたら、オモシロカッタ。

#### ■お台場海浜公園

都市の魅力は賑わいにある。街に人が集まるとき、人と人の交流が芽生え、そのなかで情報が醸され、伝達され、生き生きとした文化が育つ。都市デザインが描きだす空間は、人びとを引きつけ、コミュニケーションを誘発するものできなければならぬ。

いまさらの贅言だろうが、1950年代後半にアメリカで誕生した都市デザインは、E. N. ベイコンに代表されるモノ指向のデザインから、J. バーネットらによる制度としての都市デザインを包摂しつつ、80年代にコトを巻き起こすデザインへと展開した。しかし、古典的な近

代建築教育を受けたデザイナーは、いまでも60年代的な都市デザインの呪縛から完全に解き放たれてはいない。近隣住区の人影まばらな退屈さをメガストラクチャの無人空間に置き換えた、あの自己矛盾を往々にして繰り返している。

だが、お台場海浜公園のビーチを埋める人の波を見ていると、臨海副都心に関しては、この批判が的外れであるよう思つてくる。私たちの都市デザインは、1990年代半ばにして、ついにコトのデザインを手中にした！？

お台場が注目されたのは、昨日今日のことではない。バブルの80年代、すでにお台場はベイエリアのブレイ・スポットの一角を占めていた。バブル・カルチュアのイデオロギー、如月小春は『都市の遊び方』（新潮文庫、1986年）で「湾岸」を「私の心の故郷」と呼んでいる。

ゴミゴミ、チマチマのイメージが、強い東京の中に、これほど広ぐて殺風景な場所があったのか。そしてそれは殺風景なだけではなく、何か叙情的な気分になるほど、都市の未来を予感させる光景であった。以来私は病みつきになり、ことあるごとに湾岸に出かけていく。

夏はウインドサーフィンを楽しむ人で賑わうお台場付近も、彼女のお勧めコース。しかし、当時のお台場はまだ特殊な場所だった。そこに行くには自動車が必要品だったし、彼女の言葉を借りれば、何より「利用者の少ない」ことがこの地域の魅力のひとつだったのだから。

バブルの記号をちりばめたTOKYO物語『光る女』（相米慎二監督、1987年）に描かれたベイエリアは、粗大ゴミの山にたたずむオペラ歌手、秋吉満ちるの金色のドレスの向こうに高層のスカイラインが浮かび、デスマッチ・ショーのかかる秘密クラブが水面にネオンの影を落とす、日常世界の周縁に宙吊りにされた不条理空間だった。

#### ■水辺の街

いまのお台場、少なくとも夏の週末の海浜公園には、およそ「幻想と狂気」など似つかわしくない。色鮮やかなウインドサーフィンやビキニの少女たちは当時と変わらないが、ビーチを埋める人込みの大半は、家族連れやさまざま

世代のカップルである。浜辺を見わたす「デックス」のテラスでは、若いカップルの傍らでOJやサラリーマンのグループがグラスを傾けている。ここは、いまや街の延長。普通の人たちの憩いの場所になっている。

これまで、東京のウォーターフロント開発は水辺の街をつくってこなかった。隅田川河口から芝浦にかけて、雨後の筈のように林立した高層ビルの群れは、建築デザインの面でも十分に陳腐だが、それ以上に問題なのは水辺の私物化を再生産したことであったと思う。水辺の公共性に配慮した場合でも、大川端のように堤防を公園化し、その向こうに遊歩道をつくるのが精々だった。

こうした流れが変わりはじめたのは、天王洲アイルのボードウォークあたりからだろう。しかし、天王洲では「街」の側の仕掛けがいまひとつだった。ボルティモアのインナーハーバーでも、サンフランシスコのフィッシャーマンズ・ワーフでも、水辺の街はそんなにハイブロウなものではない。劇場とホテル、高級専門店モールの取り合わせは、賑わいの条件を読み違えたか、それを軽視したデザインの産物である。

その点、「デックス」の建築のチープな感じは悪くない。水辺との距離も、物理的にはともかく、心理的にはきわめて近しいものになっている。ボルティモアやサンフランシスコに比べると、街の側の充実度はいま一歩だが、伸びやかなビーチを控えているところは勝っていると言ってよいかもしれない。水辺の非日常性をほどよく活かしながら、それを都市活動、とりわけ商業活動と緊密に結びつけた「水辺の街」、それを私たちも享受することができるようになった。

#### ■ モデル・シティ

とかく感激は持続しない。残暑の日差しのせいも多少あったかもしれないが、テレポートブリッジを渡り、モールを歩いているうちに、だんだん気が滅入ってきた。やっぱり60年代？

ひとつは建築の質の問題である。簡単に片づければ「大味」の一言に尽きる。巨大建築が嫌いなわけではない。箱物の時代は終わったと言いつつ、東京フォーラムのアトリウムに立てば、無邪気にスゴイと思ってしまう（西側の無愛想な壁面は好きになれない）。問題はディテールの欠如である。両国、木場、青山と、東京のあちこちで、スタディ模型がそのまま巨大化したような建築には慣れっこになっていたはずだが、これだけのスケールで並べ立てられると、やはり改めて首をかしげたくなる。所詮、パビリオン建築と言ってしまえばそれまでだが。

以前、公共建築は議会のチェックがあつたりするので、初期に提示した模型やバースに変更を加えるのが難しく、それが一人歩きしがちだという話を聞いたことがある。設計の詰めの甘さを棚にあげているだけのような気がしなくもないが、もしそうだとしたら、なまじの都市デザインが罪つくりということだろうか。

そして、建築以上に問題なのが都市空間の質である。とにかく人の歩く空間ではない。現在は中途段階で、空漠としたオープンスペースの外周に施設が点在しているが、開発が進めば立派な都市空間が出現すると言われるかもしれない。しかし、このままではその期待は望み薄だろう。問題は都市デザインの本質に関わっている。臨海副都心は、模型の都市デザイン、製図板の上の都市デザインの範疇を踏みだしていない。

デンマークの都市デザイナー、J. ゲールは「屋外空間の生活とデザイン」（鹿島出版会、

1990年）で、都市空間にはアクティビティの自己増殖プロセスを誘発するものと、そうでないものの2種類があると指摘している。多くの人がいたり、何かが行われている都市空間には、いっそう多くの人と出来事が引きつけられる傾向がある。これがアクティビティの自己増殖プロセスである。このような空間では、都市活動が $1+1 \geq 3$ という公式に従う。しかし、人びとと出来事が時間的・空間的に拡散しすぎていると、賑わいを生む出来事の連鎖が断ち切られてしまう。自己増殖プロセスには一定の「臨界量」が存在する。都市デザイナーには、人と出来事のボリュームに合わせて空間のスケールを設定する技量が求められる。

1930年代前後に都市と建築の計画理論を支配するようになった機能主義は、デザインの心理的・社会的側面に無関心だった。彼らは、社会的交流の舞台であった街路と広場を無用なものとして否定し、その代わりに、道路、通路、どこまでもつづく芝生を多用した。現代都市の多くの空間がいかにも大きすぎるのは、プランナーと建築家が小さな寸法と小さな空間を正しく扱う自信がないので、万一に備えて余分な空間を挿入する癖を持っているためではないか。

ゲールはそう批判して、次のように助言する。迷ったときには、少し空間を削りなさい。

今後、中央の広大なオープンスペースが建物で充填されるようになっても、それがいま臨海副都心に建ちつつあるような建築であるかぎり、ここがアクティビティの自己増殖プロセスを誘発する街に育つ可能性はあまり期待できない。

モデル・シティならぬ、巨大化した「模型都市」に終わる公算が大きい。中途半端な「見直し案」に沿って開発を進めるぐらいなら、いまのままお花畠にしておいたほうが、将来のためによほど貴重な財産になりそうである。

#### ■ かれら自身の黄金の都市

第2次世界大戦後、イギリスの文壇と社会に反旗をひるがえした「怒れる若者たち」の一人、A. ウエスカーに「かれら自身の黄金の都市」（晶文社、1968年）という戯曲がある。

幕開きの舞台は1926年、ヨーロッパで最も美しいロマネスク教会のひとつと讃えられるダラム大聖堂の内部。そこに主人公のアンディ、恋人のジェシー、詩人にあこがれるポール、牧師を志すストーニーの4人の若者たち。アンディは貧しい製図工だが、新しい労働者の町の建設を夢見ている。彼らは、聖堂に集まつては、「ボロズボンの兄弟たち」のための「黄金の都市」の夢を語り合っていた。それは、人目につかない片隅のある光と影の町、広い通りと曲がりくねった小道のある驚きと慰めの町。

アンディは、やがて労働組合支部で頭角を現わし、建築家としても認められるようになった。

彼は、賛同者を募って労働委員会を組織し、人口10万人の町を6つ建設することを計画する。なぜ6つののか。彼はこう説明する。

町を建てるということは、その町での生活習慣をうちたてるということだ—これは事実だ。

黄金の都市を6カ所に建てれば、全社会の新しい生きかたの基盤をうちたてることができる—これは嘘だ、嘘だが、それをほくたちは知らん顔してどこまでもおしとおすのだ。

「黄金の都市」は、R. オーウエンをはじめとする空想社会主義者のユートピアの系譜に連なるものだが、その具体的なイメージには、E. ハワードの「田園都市」の影響が色濃く反映している。アンディは、彼の町をこう説明している。町の心臓部にあるのは市役所ではない。そ

こには皆のための公園、音楽堂、劇場、美術館、集会所、図書館が置かれるだろう。これは、ハワードの描いた有名な同心円ダイアグラムを彷彿させる。

アンディの計画は、奔放な貴族の娘ケートの支援を得て順調に滑りだすかに見えたが、戦争で頓挫する。そして戦争が終わり、政府の有力者とのパイプもでき、再び動きだした計画は、労働組合の方針転換にあって大幅な縮小を余儀なくされた。実現した「黄金の都市」はひとつだけ。その町についても、建設着手から10年目に、彼は、名簿に最後まで残った1万人の住民に仕事を与えるという条件で、それ以上の建設を断念する妥協案を受け入れるのだった。

また時が流れる。台本の設定では1990年ごろになるのだろうか。「卿」の称号を得たアンディは講演会でこう語る。

なにはともあれ、黄金の都市は建てられました。確かに妥協はあった、が建てられたのです。

そして、聴衆の女子学生に「私はあなたを信じません」となじられることになる。また、家庭を顧みることのなかった彼は、長年つれそったジェシーにも、あなたにとて私は「家政婦」でしかなかったと恨みの言葉を投げつけられる。

倉庫を改造した「ブレヒトの芝居小屋」で「東京演劇アンサンブル」の公演を見てから10年になる。荒削りな倉庫の空間と、布を使って抽

象化された舞台が印象深く記憶に残っている。

夢を押し流していく時間。あのころは・・・、と繰り言はやめておこう。

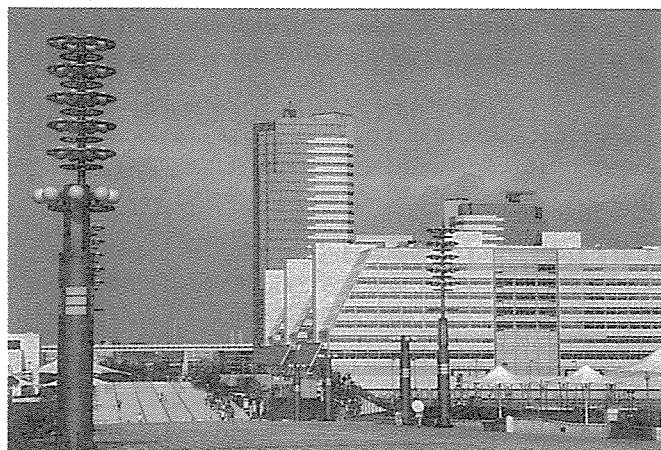
幕切れは再び1926年の大聖堂。3人の若者が騎馬を組み、ジェシーを乗せて退場する。響きわたる彼女の声。「ボロズボンの兄弟たち・・・」。

#### ■われら自身の黄金の都市

「かれら自身の黄金の都市」は、建築家（あるいは若者）の社会変革の夢が現実に裏切られていく物語である。

みなさん、ひとつの町が、成長していくのをごらんになったことがありますか？人々が彼ら自身の黄金の都市を建てるうなるような音を聞いたことがありますか？壁がそびえ、花が咲くのです。砂利が立派な道路に変わり、建設工事の砂ぼこりが一掃されれば、そこにスレートとみかけ石、ガラスとコンクリート、そして生活の喜びのためのあらゆる原型が姿をあらわすでしょう。

しかし、彼らはその都市を見ることができない。そして今、もはや「ボロズボンの兄弟たち」の共同幻想を持ち得なくなった都市デザイナーは、誰のために「黄金の都市」を描きつづけるのだろうか？臨海副都心の真ん中で「夢の大橋」は人びとをどこに誘おうとしているのだろうか？



## 臨海副都心の 環境デザイン

西澤 喜一郎  
NISIZAWA KICHIROU

東京都港湾局

### 1 臨海副都心の環境デザインの現況

現在、臨海副都心開発は、初期の都市機能の整備により都市としての活動が始まる段階と位置づけられた始動期を経て、次第に本格的なまちづくりが進んでいる。

今夏には、東京ディズニーランドを超える約270万人の人々が来訪し、東京でも有数の名所として認知されるに至った。これも、臨海副都心の立地の良さに加えて、フジテレビ本社ビル、東京ピックサイト、テレコムセンタービル等の特徴的な建築物やシンボルプロムナード等が醸し出すばららしい景観が影響しているのであろう。

臨海副都心では、ウォーターフロントの魅力を生かしながら、水と緑に囲まれた、安全で快適な都市環境の形成を目指し、まちづくりガイドライン等のガイドラインにより景観の誘導を図っている。

### 2 環境デザインの構成

景観を担保すべきガイドラインは、主として、デザイン的な視点だけでなく機能面を含めての誘導を意図した「臨海副都心まちづくりガイドライン」（まちづくりガイドライン）とそれを景観の視点から補完する機能を持つ「臨海副都心景観ガイドライン」（景観ガイドライン）の2本立てで構成されている。これは、平成2年に策定されたまちづくりガイドラインだけでは、新しいまちとして十分な景観形成が困難なという理由から平成7年度により詳細な項目にわたって景観要素に対する配慮を定めた景観ガイドラインが作られたのである。

さらに、公共施設設計指針として、「臨海副都心道路景観ガイドライン」及び「公的サインマニュアル」を作成・採用し、整備を行っている。

### 3 基本方針

まちづくりガイドラインでは、以下の4つの基本目標をもとに開発の誘導を行っている。

- (1) 海に臨む東京の新しい個性の創出
- (2) 多様な魅力を持つアメニティ空間の創造
- (3) 新しいまちと歴史との共存
- (4) 生活文化としての都市空間

これに基づいて、都市景観・環境整備方針として以下の6項目を提示し、図1の景観マスター プランを示している。

(1) シンボルプロムナードを骨格とした都市空間の形成

(2) 多様な親水空間の創出

(3) 水と緑のネットワーク

(4) 多様な景観の活用・創出による個性ある都市景観の形成

(5) 各地区・区域ごとの個性的で親しみのある都市空間の形成

(6) 「東京都における福祉のまちづくり整備指針」などに沿った快適な都市環境の形成  
(図1)

さらにこれを発展させ、景観ガイドラインでは次の基本目標を設定している。

(1) 個性豊かなまち

(2) 理解しやすい構造を持ったまち

(3) 都市としてのアイデンティティを持ったまち

(4) 調和と連続性のあるまち

(5) 人々が主役となるまち

(6) 時の経過に耐えられるまち

### 4 内容

これらのガイドラインでは、基本方針を具体化するため、都市基盤施設から敷地利用、建築形態、植栽、屋外広告物等様々な景観要素について、指針を与えていている。その中で、特徴的なものを以下に示す。

(1) シンボルプロムナード

シンボルプロムナードは、臨海副都心の骨格となる幅80m、総延長約4.2kmのプロムナードである。そのため、副都心を代表する都市空間として位置づけ、周辺施設との調和に配慮しつつ、全体の空間構成を展開する中心となっている。この特徴を生かし、植栽と歩行者動線を組み合わせることにより、「緑のネットワーク」と「歩行者ネットワーク」の背骨の形成を図っている。

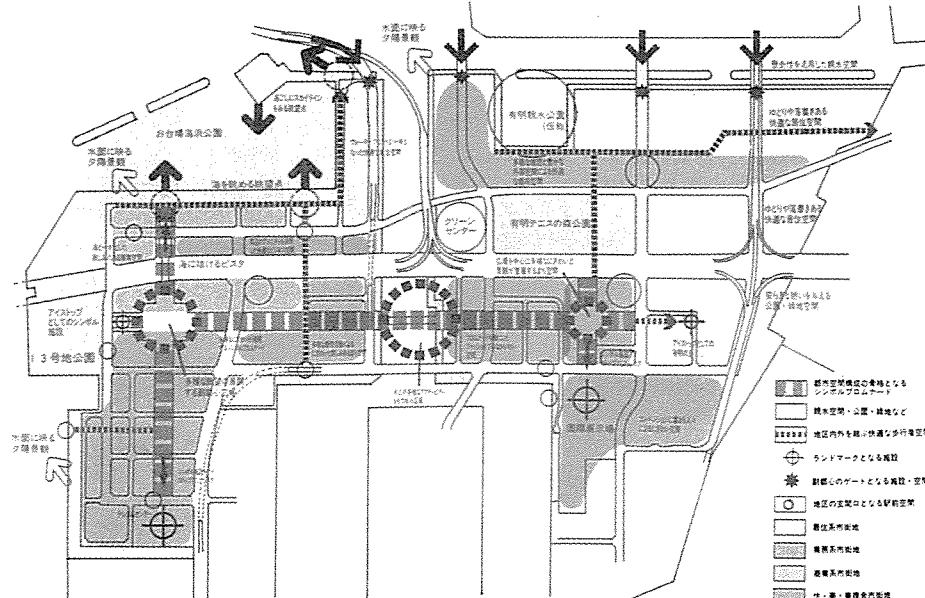
(2) 建築物

1) 臨海副都心としての一体感あるシルエットを形成するため、内側から海側に向かって、建築物の高さを低減させるように誘導する。

2) シンボルプロムナードおよび他の主要な歩行者動線に沿った建築物低層部においては、ストリートウォールの構成により、プロムナードに沿ったにぎわいを積極的に誘導するなど活用を図っている。

<図 1>

景観マスター プラン



### (3) 敷地利用

#### 1) 敷地規模

敷地の細分化による環境悪化の防止を図るために、区域毎に必要に応じて建築物の敷地面積の最小限度を定めている。これは、概ね0.5haとし、再開発地区計画において都市計画的に担保している。

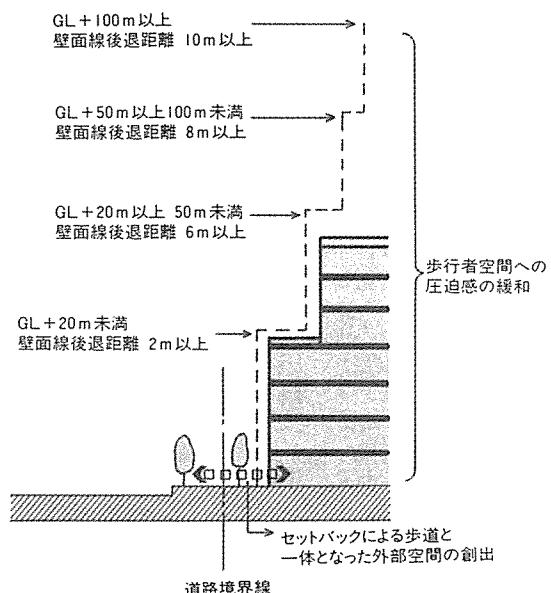
#### 2) 壁面線の位置

道路・公園等の公共空間と建築物の敷地空間とが一体となって調和のとれた総合的な都市空間を確保するため、また、隣接する敷地間でのオープンスペースの確保による防災性能の向上などを図るため、1号から3号の3つの壁面線の位置を定めている。

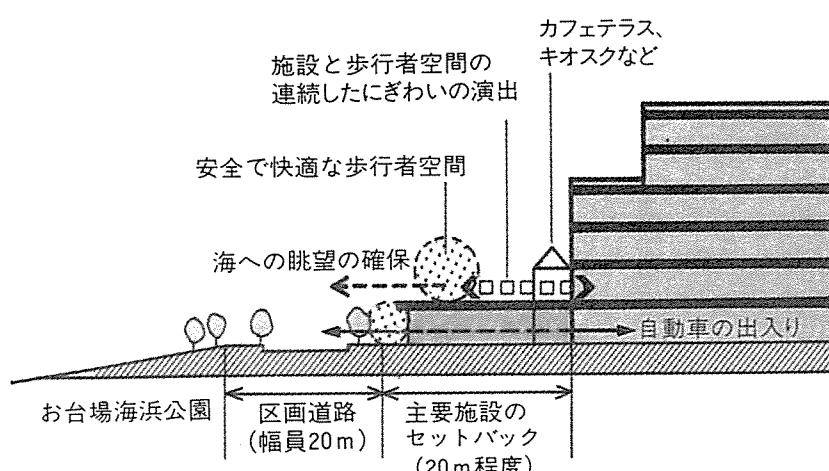
1号壁面線は、歩行者空間への圧迫感の緩和とセットバックによる歩道と一体となった外部空間の創出を目的として、大部分の道路境界線、隣地境界線部分に設定している。(図2)

2号壁面線は、プロムナードのにぎわい創出に寄与する低層部施設とプロムナード上部のにぎわい空間との一体化を図るために、境界線の延長に対して、原則として1/2以上は壁面線を境界線から6m以内とした線であり、プロムナードに面した敷地に設定している。

道路境界線(1号壁面線) <図 2>



(3号壁面線) <図 3>



3号壁面線は、水域および水際線の利用に応じたゆとりとにぎわいのある歩行者空間の創出と一体的で快適な外部空間の形成を図るために、2階レベルにおいて20m程度のセットバックにより歩行者デッキを確保する等、お台場海浜公園など多様な人々の集う水際線に隣接する敷地に設定した。(図3)

#### (4) 屋外広告物

21世紀にふさわしい新しいまちの景観や安全面を考慮し、原則として禁止とした。これを具体的に担保するため、全国でも例を見ない屋外広告物条例に基づく「臨海副都心広告協定」を進出事業者等で締結している。この特徴は、区域を誘導地区と制限地区に区分し、敷地面積に対して自家用広告物の総量を規定している。

#### (5) 色彩

「ベースカラー」と「アクセントカラー」との調和に配慮することとし、「ベースカラー」については、低彩度・中低明度を基本とし、4つの土地利用区分に分けて建物の色彩を設定している。

### 5 今後の取り組み

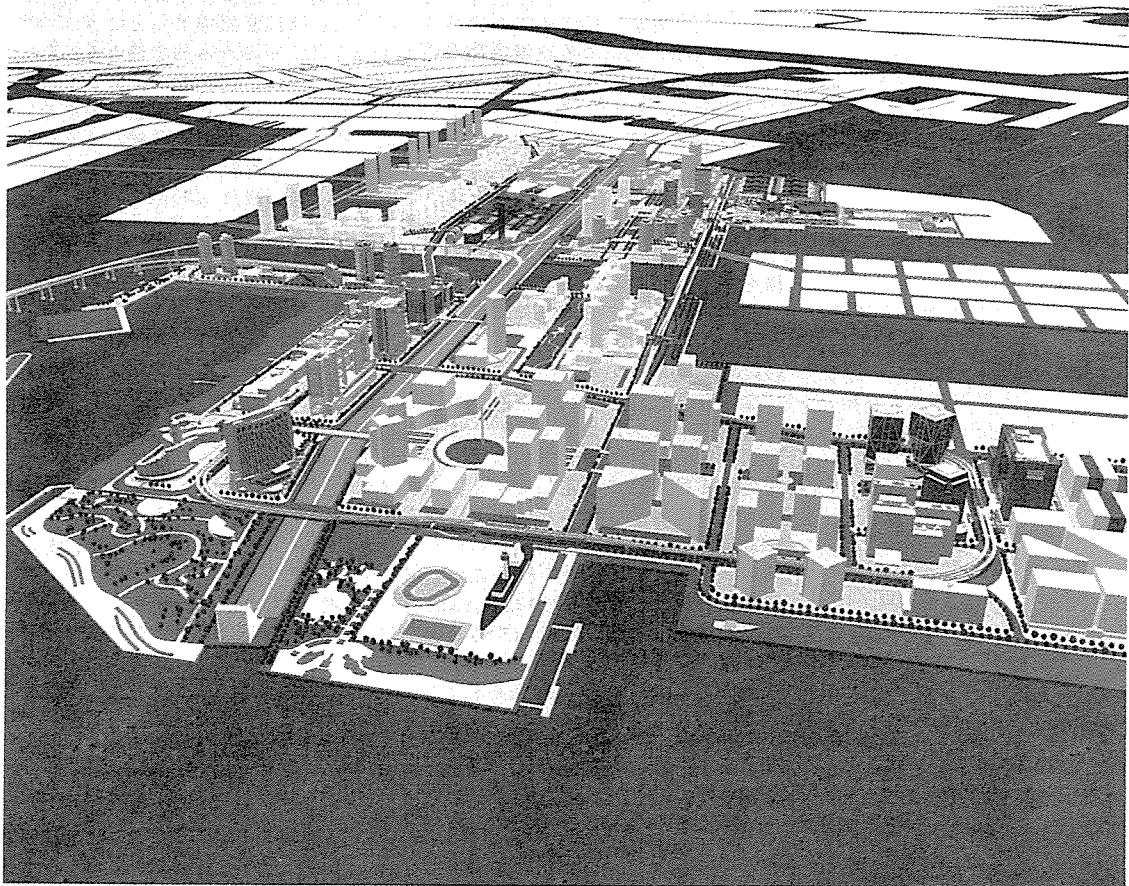
これらの2つのガイドラインを基に環境デザインの調整を図っているが、現在進められている臨海副都心開発計画の見直しに伴って土地利用計画等が変更されるため、ガイドライン自体の見直しも必要になっている。

この見直しの視点として、煩雑で重複した部分も多い2つのガイドラインを統合すべきとの考え方や計画見直しの特徴の一つである、都民からの提案を形にする「まちづくり都民提案制度」の採用等が挙げられる。

さらに、この厳しい経済情勢の中でデザインに対する制約を多くすることは、事業者にとって進出時の大きな障害となり、土地処分上好ましくないとの意見も多い。また、一方で借り手市場の中で進出事業者と開発者(港湾局)の力関係からガイドラインの着実な実施をどのように担保すべきかとの課題も多い。

このような課題を抱えながら、現在、これらのガイドラインの改定作業を進めており、3月以降に予定される第2次公募に合わせて、今年度末には新しいガイドラインができる予定である。

臨海副都心開発が都政の重要な課題となっている中で、今夏に現れたような折角の賑わいを絶やすことなく持続させていくことが、開発自体そして都民のためであると信じている。そのためには、臨海副都心の新しいまちが、どれだけ魅力あるまちになることができるのか。臨海副都心の環境デザインの果たす役割は大きい。

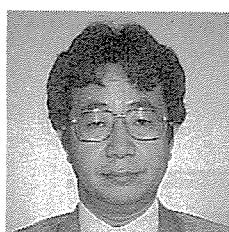


## 臨海副都心開発の 景観ガイドライン について

高澤 禮志

TAKAZAWA REIJI

(株) アバンアソシエイツ



### はじめに

臨海副都心景観ガイドラインは、「臨海副都心まちづくりガイドライン」を補完し、臨海副都心の都市環境を、景観的観点から良好にする目的で策定されたものである。

東京都を代表する望ましい街として臨海副都心を形成するための手法の一つとして、景観ガイドラインの策定にとりかかったのであるが、ここでは、景観ガイドラインの策定の当初から関わってきた者の一人として、景観ガイドラインを策定するにあたって考えてきた事、先ずはなぜガイドラインが必要なのか、ガイドラインにどのような理念を盛り込むべきか、そして、ガイドラインを有効ならしめるために配慮すべき問題点はなにか、について記しつつ、景観ガイドラインの特色（すなわち、景観ガイドラインから見た臨海副都心まちづくりの特質）を見て行きたい。

1 景観ガイドラインを何の役に立たせるのか？

(1) 伝統や様式に代わる明示的な規範の必要 東京が、統一感の乏しい雑然とした印象の都市となってしまったのはどうしてであろうか？

臨海副都心は、都市としての一貫性をもった街にしたい。これが、景観ガイドラインの策定の当初からの私たちの問題意識であった。

かつて、伝統や様式に即して個々の建物が建てられていた時代は、この「伝統」、「様式」が暗黙の規範として作用することによって、都市が統一的な構造を得てきたと言える。街路などのオープンスペースや、建築物の連続した景観といった、公共性をもつ環境（即ち「公的環境」）は、この暗黙の規範によって、統一感と多様性の望ましいバランスを獲得していたのだと言えよう。

一方現代では、建築は、形態、スケール、材料等に対する自由度が極めて拡大し、そのため、個々の建築物が都市の中で景観的に孤立化する可能性が高まっていると言える。個性の強いデザインの並立から生じる強力なコントラスト故に、都市に必要な一貫性が無視される状況が生じていると言うことができる。

また、かつて公的環境の暗黙の規範であった「伝統」、「様式」は現在急速に失われつつあり、あるいは残っていたとしても、これらの伝統的規範は、近年見られるような大規模開発には対応できないことが多い。

私たちは、臨海副都心においては、建築物の過度の多様性によって都市のハーモニーが欠如することを防ぎ、都市景観としての一体感を作り出す必要があると考え、そのためには、これら暗黙の規範に代わる「明示的な規範」が必要であると考えるにいたったのである。

(2) 公的環境に対するデザイン

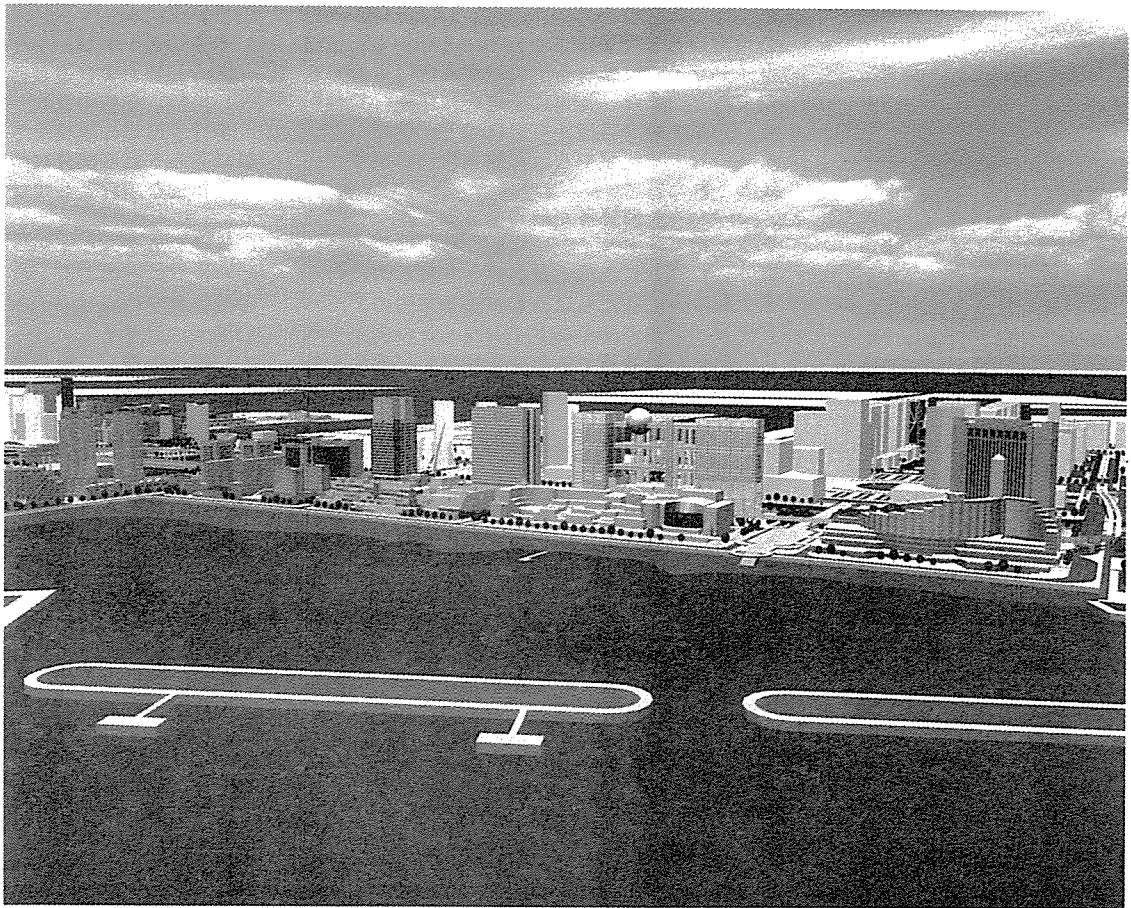
このような考えは、欧米各国においては、アーバンデザインという概念のもと、多くの都市デザインにおいて用いられているものである。

もちろん、わが国においても、横浜や幕張などの開発において導入されている概念である。

アーバンデザイン（様々な定義がなされではいるが、）とは、所有者・管理者の公私を問わず公共性を持つ空間、機能、およびそれらを支えるインフラストラクチャー、即ち公的環境に対するデザインのことであると考えられる。

私たちが、景観ガイドラインを策定する過程でおこなった作業は、即ち、臨海副都心におけるアーバンデザインを明示的な規範として記述することであった。

アーバンデザインの対象は、道路、公園といった公共空間はもちろんのこと、私有地内であ



ってもこれらの公共空間と連続して設けられた公共性のある空間にまでおよぶことから、景観ガイドラインは私有空間に対する制限も含むものであり、また、都市に一定の秩序や一貫性をもたらすという目標から、自ずと、個々のデザインに対する制限や複数の建築物間の調整が必要とされた。

そのため、関係者が納得できるような合理性をもったガイドラインにするためには、そこに盛り込む理念に説得力が必要とされるのは言うまでもない。私たちは、わが国や米国のアーバンデザインやデザインガイドラインの調査を基に、それらに共通する理念を抽出し、それを参考にして臨海副都心独自の理念を引きだそうとした。

### (3) アーバンデザインの視点

わが国や米国のアーバンデザインに共通する理念には、以下のようなものが認められ、臨海副都心の景観ガイドラインにも、これらの理念を援用している。

#### 1) コンテクストの継承・強化

まず第一に、都市のデザイン的な一貫性を、具体的にどのように確保するかの問題が存在する。アーバンデザインを行っている都市に共通するのは、既に存在する「周辺のコンテクストを継承し、強化する」という価値観である。既存市街地の再開発であればもちろんのこと、埋立地での新規開発の例においても、その隣接地にはコンテクストが存在しているものであり、これらを尊重することによってこそ、人々に広く支持される街が成立しうる、というものである。

しかし、ただコンテクストを継承するだけではなく、以下に述べるようなさらなる理念のもとに、コンテクストを強化したり、あるいは、必要な場合には新たなコンテクストを創造したりすることも考えられうる。

#### 2) 街路環境の重視

公的環境の中で最も大きな割合をしめるのが、街路である。それゆえ、アーバンデザインの対象としては、街路環境が最も重視されていると言える。さらに言えば、ここで言う街路環境とは、歩行者（ペデストリアン）にとっての環境であると言うことが出来る。具体的には、以下のような項目について、ガイドラインに記述されることが多い。

##### ○歩道のネットワーク

ウォーターフロント沿いの遊歩道等、緑道等を活用し、魅力的な歩道のネットワークを形成する等。

○主要な歩道に面する建築物の地上階用途の指定歩道のアクティビティを高めるため、店舗等の要素を積極的に1階部分に誘導し、また、1階部分前面に駐車場を直接設けることを排除する等。

##### ○ストリートウォールの位置（壁面線）ストリートウォールの高さの指定

街路空間の一貫性を保つために、建築壁面線（ストリートウォールライン）、ストリートウォールの高さ（コーニスラインの高さ）を指定する等。

##### ○街路の仕上げ／ストリートファニチャー／照明／植栽／サイン

街路空間の具体的なデザインに対する統一性／整合性を持たせるため、これらの項目に対する規制・誘導をおこなう等。

##### ○主要出入口・開口部／アーケード／キャノピー・オーニング

建築物の外部デザインの中で歩行者環境に重要な要素に対してデザインの基準を与える等。

#### ○ランドスケープ／オープンスペース

歩道のネットワークと関連させオープンスペースの配置および連続性等を考慮する等。

#### 3) 美観、形態の重視

歩行者環境の重視をさらに進めて、公共の規線にさらされる部分についての規制が行われる。具体的な項目としては以下のものが挙げられる。

##### ○外壁のテクスチャー

##### ○バルコニーの可否／位置／テクスチャー

##### ○設備機器の隠ぺい

##### ○屋上のデザイン／ルーフトップの形態

#### 4) 都市景観、自然環境重視

計画地の外部、遠方からの計画地の姿、計画地内部から外部への眺望など、さらに大きなスケールの景観に関わる形態的コントロールが行われる。

##### ○ビューコリドーの計画

ビューコリドーとは、計画地内部の多くの地点から外部の対象（モニュメンタルな建造物、山、海、川等の自然等）を眺望出来るように、街路空間を中心に、建築物の位置、高さ等を定めてつくる空間を言う。

##### ○中心部から周辺部に向かっての、建築高の低減

##### ○眺望

##### ○日照

#### 5) 経済性に対する配慮

ガイドラインの存在が開発に際してわずかであれコスト増を引き起こすことは、諸事例においても概ね認められていたが、これらは自ずと、関係者が納得できる範囲のものでなくてはならない。

一般的には、以下の理由により、いくらかのコスト増があってもガイドラインの存在は都市の開発にとって有益であると考えられている。

○デザインガイドラインの市場性に対する効果  
コストの上昇は生じるもの、デザインガイドラインの存在により開発の質が向上することにより、同時に不動産として市場性が獲得されることにより開発の手法としては成立する  
○アーバンデザインの目的への合致

ガイドラインの存在によるコスト上昇分は通常わずかであり、それによる公的環境の向上というメリットの方が大である

#### 2 景観ガイドラインにおける基本的視点

##### （1）景観ガイドラインに盛り込まれた理念

わが国や米国のアーバンデザインの事例から学び、また、まちづくりガイドラインに盛り込まれた理念を継承、発展させた結果、景観ガイドラインには大きく6つの理念が盛り込まれている。

その具体的な内容は、景観ガイドライン内に、「景観形成の基本的視点」として記述されている。

以下に、その原文を載せ、その後、それについて解説を加えることによって、臨海副都心景観ガイドラインの理念について解説する。

○過度にならない適正な誘導（統一性と多様性とのバランス）

良好な景観を形成するものは、統一性と多様性とのバランスである。個々の計画者の創造性が過度の誘導によって損なわれることのないように、適切に指針を定めることが重要である。

また、運用にあたってもこの観点が尊重されるべきである。このことにより、臨海副都心内の様々な開発の独自性を保証し、個性豊かなまちの実現を図る。

○まちに明確な構造をつくる（ネットワークおよびランドマーク）

シンボルプロムナード、道路、公園・緑地を骨格に、「オープンスペースのネットワーク」、「緑のネットワーク」、「歩行者のネットワーク」を構成し、まちの構造を明確化し、まちのわかりやすさ、連続性を確保する。

また、デザイン、規模等により周囲から際だったランドマークを配置することによって、まちの構造を効果的に表現する。

のことにより、臨海副都心を有機的に結合するとともに、理解しやすい構造をもったまちとする。

○まちに景観的な秩序をつくる（スカイラインおよびマップ）

統一感あるまちなみや通景軸を確保し、また臨海副都心全体としてのまとまりを表現するため、建築物の形態、マップ、位置等を適宜誘導し、それらによるスカイラインおよび都市の空間構成を整える。

のことにより、臨海副都心の都市としてのアイデンティティを形成する。

○人々の活動に即した場を形成する（こまやかなゾーニング）

道路、建築物、色彩等、都市を構成する様々な要素に対して、同一のゾーニングによって性格付けを行うと、隣接するゾーン間の連続性や関係性が希薄となりがちである。地区、区域、区画、プロムナード、道路それぞれの特質に応じた景観を誘導するため、都市を構成する様々な要素ごとに適切なゾーニングに基づく性格付けを行う。これらを重ね合わせることにより、人々の活動にこまやかに対応した場を形成することが可能となる。のことにより、個性が実現される中にも、調和と連続性が確保された統一感のあるまちが出現する。

○人々の活動の背景を形成する（背景としての都市景観）

まちの主役は、そこで繰り広げられる人々の活動であり、まちの景観は、その背景となるべきものである。まちを構成する各要素の計画に当たっては、表面的で過度なデザインを避け、背景としての抑制のきいたデザインとする。

のことにより、都市で暮らし、働く人々の活動を主体としたまちが実現される。

○時とともに豊かさを増す（エイジング）

まちは世代を越えて存在し、常に次世代への遺産である。まちに存在するデザイン、材料等は、時とともに豊かさを増し、まちとしてのアイデンティティを形成する。まちの成長に応じて導入される新しいデザイン、材料は、新たな調和を形づくる際の、基盤となるべきものである。臨海副都心におけるデザイン、材料等の選択にあたっては、このエイジングの観点に配慮するべきである。のことにより、世代を越えて誇れる、時の経過に耐えられるまちを建設することが可能となる。

(2) 過度にならない適正な誘導（統一性と多様性とのバランス）

1) 計画者の創造性の尊重

ガイドラインの策定は、個々の建築物のデザインに関する自由裁量性の一部を制限する事を意味しているのは確かである。

それ故、個々の建築物を設計する建築家が要求する建築デザインに対する自由裁量性と、全体の調和を目的としたデザインガイドラインの制限との間に衝突が生ずることが予想される。

私たちは、基本的には、良好な都市を形づくるためには、計画者、建築家の創造性を尊重すべきである、と考えており、そのため、ガイドラインの表現を適切にすることによって、街の統一性と多様性をバランスさせなくてはならぬ

いとの考えた。

一般にガイドラインには、「まちづくりに関する理念やビジョンの表明」といった大きな内容から、具体的な数値を示してその遵守をもとめるといった内容まで、さまざまなレベルの内容が組み込まれるのが通常である。

これら様々なレベルの記述が、すべて同等の厳格さで遵守を求めるなら、街の多様性が阻害されてしまうおそれが生じるし、さらには、そもそも「ビジョン（基本的、概括的な理念）の表明」といった性格の記述をあるプロジェクトが遵守しているか否かを、Yes/Noで二者択一的に判断することは不可能であると言える。そのため、できるだけガイドラインの記述自体から、それが努力目標であるか、厳格に遵守すべき事項であるかがわかるような表現とするように工夫した。また、ガイドラインの各項目の記述を、基本認識と指針とに二分し、記述のレベルの差を理解しやすいように工夫した。

今までの研究によると、既存のコンテクストや社会的合意を尊重する限りは、自由裁量性の一部制限が、そのまま創造性の制限につながるものではないと考えられる。ガイドラインによる自由裁量性の制限にも関わらず、建築家の創造性が遺憾なく発揮されたと見なされている例も存在する。

2) 運用

実際の設計に際して、ガイドラインの個々の内容を厳格に適用しすぎて、創造性を減ずることを防ぎ、統一性と多様性のバランスをとるための方法が、ガイドラインの運用に関しても配慮がなされている。

景観ガイドラインの条文には、「（景観ガイドラインに基づく）誘導、調整に際しては、事業者の意図に十分配慮し、合意を得るものとする。」という一文が入っており、個々の条件に配慮しない画一的、機械的なガイドラインの運用をおこなわないよう意図されている。

具体的には、設計のフェーズにおいて2度にわたってデザインレビューの場を設け、ガイドラインの趣旨、設計者や開発者の意向等について充分意見交換をしていくとしている。

(3) まちに明確な構造をつくる（ネットワークおよびランドマーク）

1) ネットワーク

歩行者の視点から街のデザインを行おうとする考えが反映されている。

「緑のネットワーク」、「歩行者のネットワーク」を公共空間を連続させることにより確保するとともに、区画内のオープンスペースや、街区を貫く敷地内通路などを誘導することにより、これらもネットワークに組み込もうとしている。

2) ランドマーク

ランドマークを、都市の軸性や方向性等の秩序を視覚的に強調するもの、地域、地区の個性を生み出すものとして捉え、ガイドラインによってその配置を定めている。

同時に、ランドマーク以外の建築物、土木構造物に対しては、デザイン、色彩等に節度を求め、ランドマークが効果的に機能するように配慮している。

(4) まちに景観的な秩序をつくる（スカイラインおよびマップ）

1) 建築物の形態、マップ、位置等の誘導

建築物の形態としては、米国のおしゃれな都市に多く見られる「三層構成」という考え方を基本に置いている。

「三層構成」とは、建築物を下部から、ベース、タワー、トップの3層で構成するものであ

り、ベースは、ストリートウォールを構成する部分であり、街路空間に最も影響を与える部分である。

タワーは、ベースからセットバックし、塔状にそびえる部分であり、容積的には建物の主要部分を占める。街路環境に直接影響を与えずに、必要な、あるいは、許容される容積を消化するための部分であると言える。

トップは、タワーの上部の形態であり、一般的には、都市のスカイラインを決定するもの、また多様性を醸し出すものと見なされている。

三層構成は、街路環境、外部から見た都市景観、望ましい容積の確保と言った機能、を同時に満たすための方策であり、景観ガイドラインにおいては、ストリートウォールの位置を設定することによって連続的な街路環境を作りだすと共に、必要に応じてタワー部(塔状高層部分)の位置も定めて、遠景、中景からのマッスを整えるように考えられている。

## 2) スカイライン

都市のスカイラインは、主に都市の外部から遠景として眺められる場合のデザインである。

景観ガイドラインにおいては、基本的にウォーターフロントから中心部にかけて徐々に高くなるスカイラインを設定し、臨海副都心の一体的な街としてのアイデンティティを確保するよう配慮されている。

(5) 人々の活動に即した場を形成する（こまやかなゾーニング）

1) 人々の活動にこまやかに対応した「場」の形成

景観ガイドラインの第3章「地区・区域別指針」において、各地区・区域の特性にしたがつ

て固有の指針を与えるとともに、色彩、サイン、ストリートウォール等の指針についても、臨海副都心全体を画一的な指針としないような配慮がなされている。

(6) 人々の活動の背景を形成する（「背景」としての都市景観）

1) 背景としての抑制のきいたデザイン

街の中での主役はあくまでも人間であり、建築物等のデザインが勝手に自己主張して周囲の環境から孤立せず、それらの集合が全体として調和するのが望ましいとの考え方から、色彩、サイン、ストリートファニチャー等の指針には、デザインの抑制について記述されている。

色彩に関しては、「ベースカラー」という概念を導入し、低彩度・中低明度色を街の基調となる色彩として誘導しようとしている。

(7) 時とともに豊かさを増す（エイジング）

1) エイジング

都市は永続的なものであり、街づくりは、そのような永続性を前提としなくてはならないとの考え方から、建築物、ストリートファニチャー、舗装等の材料の選定に際しても、エイジングに配慮することが求められている。

おわりに

街づくりは、多くの関係者によって長期に渡ってなされる大事業である。景観ガイドラインの策定には、その記述一つ一つが様々な問題をはらんでおり、最終的に現在の形態をとるまでには様々な紆余曲折があったものの、今、臨海副都心の景観に対して、望ましいフレームを与えておくことは、将来必ず人々に支持される街にと成熟することに結実するものと信じるものである。

何と汚い水と思うかもしれない。巨大な橋やビルに経済力を読み取る人もいようと思う。

かつて、ヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカなどそれぞれ異なる風土・地域ごとに、風景を構成している建物の形や色が異なって、際立った対比性を見せていました空間に、近代化された臨海部が持つ世界共通の機能性が、共通のクレーンや建物を求める事となり、地域の固有性を弱めているように見える世界的傾向の中で、シドニーのオペラハウス、ニューヨークの世界貿易センター、バンコクのバゴダ、イスタンブールのモスクなどそれぞれポピュラーな意味を持った形は、地域ごとのシンボル性を高めながら、人の目に美しい印象を与えてくれる。東京臨海部の場合、何が印象的なシーンとなるのだろう。

ペイブリッジの先端的土木技術の成果や、臨海副都心予定地に林立し始めた20世紀末の建築デザインによるビル群が経済大国になった日本の姿を象徴的に表現していく、新しい日本の姿を印象づける事になるのだろうか？

今年の8月の暑い日、久し振りにクルーズを行なった時は、高層ビルやクレーンが真夏の太陽にさん然と輝いて頗もしく見えたが、それと共にこれらの巨大な文明構築の営為が、どの様な方向で将来の臨海地域環境の在り方を決定付けていくのかと気になった。巷で言われるところの自然と文明の共生の在り方が最も問われる地域なのだと言う事も確認しながらの東京湾巡りであった。

# 東京臨海副都心 周辺の風景考

小林 治人  
KOBAYASHI HARUTO

(株) 東京ランドスケープ  
研究所



最近の東京臨海副都心ならびにその周辺部を水上から見ると、水平な水面上に幾何学的なビル群、巨大なクレーンが林立して臨海部固有のスカイラインを不連続的に構成している。15年有余前、御台場海浜公園あるいは前後して設計を担当した13号地公園などの設計調査のために見た風景とはずいぶんと趣を異にした風景が展開されている。

当時、埋め立て事業によって造成された土地というイメージが強く、大東京の副都心が計画されて高層ビルが立ち並ぶ風景や、ましてや観光地のように多くの人々を引き付けていた最近の状況を創造する事は困難であった。当時は唯一、船の科学館のみが目っていたくらいで後は広々としたオープンスペースであった。このことが雄大なスケール観のある公園を造るのにはもってこいと言う発想に結び付けていたことなどが懐かしく思い出される。

いま、このような個人的にも思い入れのある場所に表現される風景からは、世界の諸都市の臨海部の風景と基本的に類似性を持ちながら一味違つて、身近な印象を受ける。これは、やはり自分が生活する国の風景からは、風景に表現された人々の暮らしの物語の意味が直接的に読み取れるからだろうかなどと考えたりする。

その反面、この風景を外国人が初めて見たらどの様に評価するのだろうかと考えた。例えば、水を見てアジアの巨大都市の人は、腐臭がなくて綺麗だと受け取るかもしれないし、北欧諸国の人は

そんな中で、水際線が風景全体の連続性を保つ上で非常に重要であることを再認識した。臨海部の主要な空間を占める港湾機能を充足させるために大部分の水際線は、コンクリートの直立岸壁でガードされているが、御台場の石詰みは歴史性を、岸辺に残された残杭とそこに翼を休めるウミウは生き物空間としての海を、浜離宮庭園、御台場公園、辰巳公園、緑道などの縁は、空間全体の連続性と、人工的構築物の前景として水面との関係を安定的風景に見せるのに役だっているように思う。公園緑地の視覚的側面からの効果と環境形成・構築に及ぼす影響の大きさを思った。

臨海部と連続した隅田川の堤防は、水面から見ると奇異に感じるほど多様なデザインが施されていて驚かされるが、率直なところ疑問を持った。これらのデザインがなぜ行なわれたかを考えたとき、視線の位置に関係があるのでないかと気付いた。それは、水面からの視線よりは橋の上あるいは堤防ぞいの道路からの視点を主体に考えた結果ではないかと言う事である。水上からのシーク

エンスとしては問題があるよう見えるが、地上部か視点を固定的に見たときには、各地点ごとの特徴がシーンとなって眺める事ができ、川沿いの各種施設の展開と、土地利用特性、行政界などから堤防空間が区分されている様子と、それぞれのデザインモチーフで、思い思いで極めて変化に富んだ風景造り？が行なわれていると受け止た次第である。いずれにせよ風景造りが過剰なまでに意識される時代である事を感じながらも、このようなときには、新たに風景の要素をプラスしていくだけでなく、余分と思われるものをマイナスしていく発想も必要なように思うが、現実は、合い矛盾する要素条件を混合させながら、結果としては過剰なまでに各種の施設が混在していくことが良くあるが、このような状況こそ、日本ののだと自分に言い聞かせる事も多い。

こんな思いを持ちながら、ここに、東京ランドスケープ研究所が担当した臨海副都心周辺の公園を紹介することとしたい。

#### ■東京都潮風公園

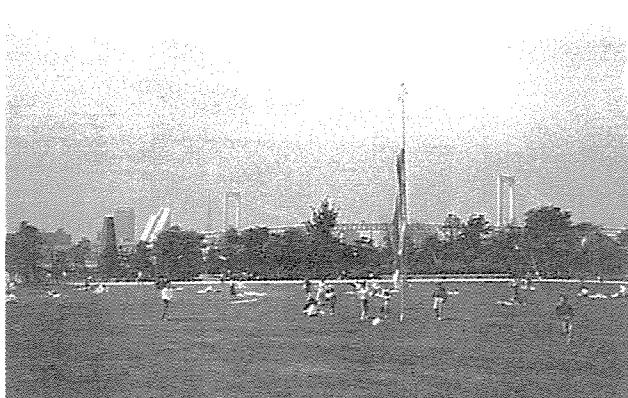
##### 1. 経緯

都立潮風公園は、東京都の副都心計画のひとつとして、東京港内の埋立地の再開発により建設が進められている「臨海副都心《東京テレポートタウン》」の南西部に位置する広域公園で、東京フロンティアの開催スケジュールに合わせて整備が進められ、臨海副都心の中央公園として位置づけられた公園である。

潮風公園の前身は「都立十三号地公園」で、昭和49年6月に13号埋立地東側に開園されてから改修工事着工（平成4年11月）までの約18年間ウォーターフロントの憩いの場として都民に親しまれてきた。1989年より整備計画がたてられ、実施設計が1993年にまとめられた。工事は1992年11月から護岸部の改修工事がスタートし、1996年3月24日（日）開園を向かえた。



水と緑のプロムナード…ゆりかもめから富士山方向を見る



太陽の広場…背後にレインボーブリッジが見える



プロムナードの抑えとなる噴水広場



北コーストデッキ…水辺のアート、タ陽の塔、レインボーブリッジ

## ■大井ふ頭お台場海浜公園

### 1. 経緯

東京湾に浮かぶ「お台場海浜公園」は、1986年の4月に若者達の間でブームとなっているウインドサーフィンの基地としてのマリーンハウスと養浜部の完成をもってほぼ完成した。1971年頃の高度成長期に急速に水質汚染の進んだ東京湾であったが、最近は徐々にきれいになり、汚染水独自の臭いもさほど気にならないまでになってきた。

イソシギ、アジサシ、ユリ、カモメなど水辺の野鳥も戻りつつある。

設計に入るまでの計画地は、国内や国外各地から運ばれてきた木材の貯木場であったが、すでに営業的使用は停止されており、海底や波打ち際に

木材の残片が横たわり、海の廃墟の景を呈していた。

“東京湾に自然のなぎさを・・・”と言われて久しく、やっと葛西沖の人工なぎさや京浜運河沿いの大井中央海浜公園等のなぎさや磯、干潟がつくられ、お台場海浜公園の親水護岸等もこうした時代の流れを反映し計画されたものであった。

このお台場海浜公園は、海浜の自然環境の保全と釣り、潮干狩り、磯遊びや、水上でのウインドサーフィン等水辺のレクリエーション利用と対峙する二面性を有する海浜公園であるが、今後の埋立地のあり方について、いくつかの新しい時代へのアイデアが盛り込めたと思うので以下に紹介したい。



植栽された樹木は風景の構成に不可欠である。



お台場の緑が臨海部の風景を引き立たせている。



広がりのある風景の中では、従来雑草といわれていた樹草類の存在は貴重であるが、これからは、自生してくる植物を育て観察する発想が求められる。

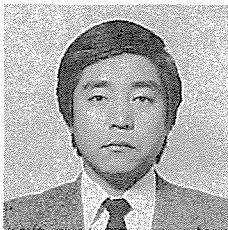
## 東京都臨海副都心の環境デザイン

一湾岸の2つの新都市づくりの実験から～今後の都市づくりに期待する～

中野 恒明

NAKANO TSUNEAKI

アブル総合設計事務所



この20年近くの間に東京湾岸を舞台とする幾つかの新副都心づくりが動いてきた。私も瀬戸内の海辺に育った関係から、気がついてみれば湾岸に住み、最初は千葉市の海浜ニュータウン、今では浦安市の臨海埋立地である。今やこの地に根をおろす存在となり、水際の立地を活かした生活環境に満足し、むしろ地域の環境改善に専門家としてのめり込んでいる始末である。その意味では都臨海副都心の開発は私の住居と事務所の間、かつ羽田空港への道すがら、目にする場所であるがゆえに、大きな関心を有している。

臨海副都心の「環境デザイン」に関してもう一つの新副都心開発の成れの果て、千葉海浜ニュータウンの幕張の「環境デザイン」との対比に私なりに注目している。双方とも私の事務所としても何らかの関わりを持っている点でも共通項がある。

臨海副都心の場合は東京フロンティア博覧会の整備寸前だが、インフラである道路景観整備検討委員会（篠原修委員長）の委員を2カ年、その次の年には全体の道路、広場等の公共空間デザインのデザインコーディネーターとして、様々な事務所との協同作業をこなしてきた。その成果については既に雑誌などを通してご存じの方も多いと思う。

都臨海副都心の開発構想から計画着手、東京フロンティア博覧会の計画から中止、開発計画の見直し等々のプロセスに関し、おそらくJUDI関係者も深く関与されていることと思う。

私も公共空間のデザインに関わり、発表の機会を失ったと言う無念さがあることは否定できないが、アーバンデザイン不在とも言うべき、臨海副都心の建物等の施設づくりが、一旦ストップし見直しの時間が与えられたことを歓迎している。むしろ時間をかけて真のアーバンデザイン付きの街づくりが行われるための好機として捉えたい。しかし、一部が虫食い的に開発され、それが墓標のような形をした建物のように見える。開発し残された部分のアーバンデザインとなると、空寂しい気もしない訳でも無いが……。

当初計画に対する懸念は「建築雑誌1993年4月号－東京臨海副都心をどう思うか」に寄稿した文章がある。ここでは一街並づくりへの視点を問うとして、公共空間のデザインに関わる傍ら、建物計画を横目で見ながら書いたものである。抜粋をここに紹介しておきたい。「スーパープロックの街割がなされ、そこに超高層建築群が、水際にはリゾート地風の商業施設、ウォーターフロント住宅が並び、間隙を縫って新交通が走る。「街づくりガイドライン」がつくられ、景観に配慮した公共空間の設計、建築物に対する形態コントロールが行われると聞く。

理想都市実現への努力が払われているのである。一中略－この計画の成り行きに興味と同時に危惧の念を抱く－その一つが、はたして思惑通りに魅力ある人間環境都市に、また美しい街並形成になるのか、と言った点である。

幅100mの湾岸道路の両側に新都市が造成される訳だが、計画的に造られた広幅員の街路や公園やプロムナードもある。公共用地はかなりの率になる。

残りが都市的活動の場である建築敷地だが、そこでも超高層を実現するために公開空地を大量に造りだす。ガイドラインでは街並形成のためのセットフォワードの考え方も導入されるようだが、個別の敷地では中央に超高層建築が聳え、周囲に低層建築や空地が配される、といった言わばどこにでも見られる墓標型建築の単なる集合にしか見て來ない。容積確保の手法として安易に外部空間が創造されるとしたら、それは本来の趣旨に反することかも知れない。湾岸の気象条件に対して広大な外部空間が快適性を創出しうるのか。ヒューマンな環境形成はいかに。私には街並に対する明確なポリシーが読み取れないのが残念である。」

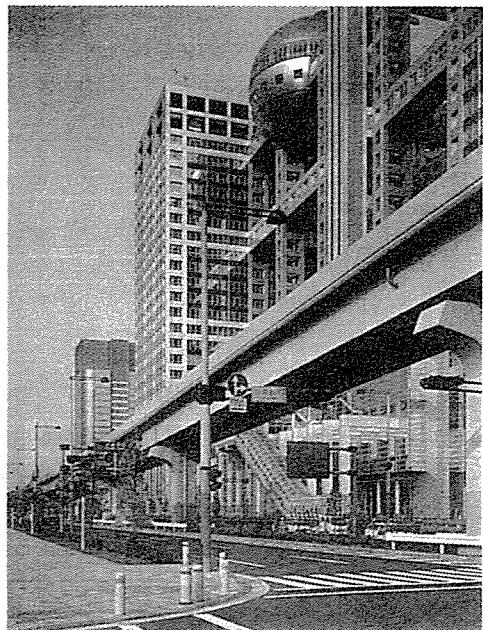


写真1 新交通台場駅付近の風景



写真2 東京フロンティア会場予定地からみるお台場方面の建築群と歩道橋



写真3 幕張ベイタウン・パティオスの街並み

その対極にあるのが幕張ベイタウンの住宅地計画であり、公共空間もさることながら、建物を含めたトータルなアーバンデザインの実践が行われてきている。細かなかつ柔軟な対応のできるデザインガイドラインが用意され、多くのアトリエ系設計事務所が参画し、そのデザイン密度、計画作業の密度には頭の下がる思いがする。私の事務所でもその一角をお手伝いし、調整作業の難しさを伝え聞いてきた。また街区型

ゆえの設計の難しさもある。戦前の同潤会のロの字、コの字型住棟による街並み形成を目指した清砂アパートや沿道型の青山アパートを見る「街区」、「都市居住」を意識した、あの時代の記念碑と、現代版街並み形成の"幕張"の関連を私なりに読み取ってきた。

それに対し、"臨海"は各々の建物が風景の中に屹立し、自由気ままに自己主張する構図となっている。現実に出来上がっている建物は実際に自己主張の強い建物群である。そこに新交通システムが走り、広大なオープンスペースがある。これはあたかも1920年代にル・コルビジェの提唱した「輝ける都市」のイメージを世纪末に具現化された姿と見ることもできる。

その意味での両者の対比が見事である。"幕張"の場合、街並み形成型住宅の実験であり、街区型建築がわが国の風土に馴染むのか、と見る向きも無いわけではない。またメッセを含めたトータルなアーバンデザインは何処に。と言う意見もある。一方、"臨海"は全体としての自由さが基調となり、お台場周辺の街並みは特異と言うべき奔放さがある。現にこの界隈の週末の賑わいは想像を絶するものがあり、極めて現代的な風景が出現している。これはスタティックな"幕張"には無い面白さと言っても良い。

お台場の賑わう所以は、その場所柄、それに奔放さがマッチしたことでもできるし、建物よりもむしろその環境にあるのかも知れない。

またそれを初めて知った都会人の喜びが具現化しているのだろう。お台場海浜公園から見る水辺の風景、内水面越しにレインボーブリッジ

が、そして東京の夜景が映し出される風景は実際に魅力的である。また夏の日中も橋を通行する車の列、ウインドサーフィンに興じる若者、行き交う船、その砂浜の優れた視点場がある。背景の高層住宅棟、そして公園の緑、そこでくつろぐ若者達、建物低層部の店舗の賑わい、都市空間における魅力的な要素が数多く存在している。つまり臨海の場合は周囲を海に囲まれた場であり、お台場海浜公園だけでなく、多くの魅力資源が存在する。また埋め立ての経緯から公園緑地にしか使えない数多くの土地がある。

私どもの関わった公共空間のデザイン、とりわけ道路の景観設計では、これら多くの魅力資源、変化に富んだ建物群の中で、「せめてここだけでもシンプルで統一的なデザインを!」と努力したつもりではある。敢えてこの説明は差し控えたいが、これがどのような形で評価されるのかは時間の経過を待ちたいし、会員各位の意見を拝聴したいと思っている。

"臨海"のアーバンデザインの仕組みや建物群の評価については専門家筋から様々な意見があると思う。しかし水際空間としての魅力度、今後の発展性については疑う余地の無い可能性を秘めている。この環境資産としての多くの魅力資源を活かした街づくり、これが"臨海"のアーバンデザイン、環境デザインには求められていると思う。じっくりと時間を頂いたことを逆に"福"とすべきではないだろうか。

以上が東京湾岸の埋立地の住人としての欲目的評価であるし、今世紀末の新都市づくりの実験を永く観察して行きたい。

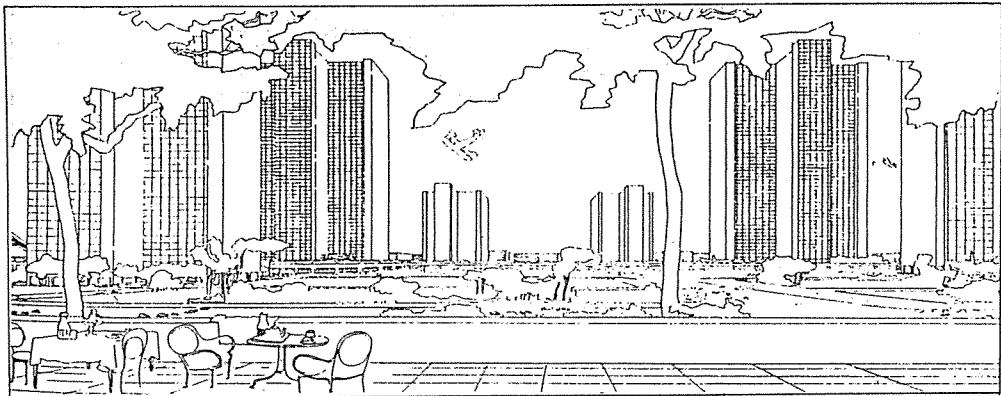


図1 ル・コルビジェの「300万人の都市」のための透視図

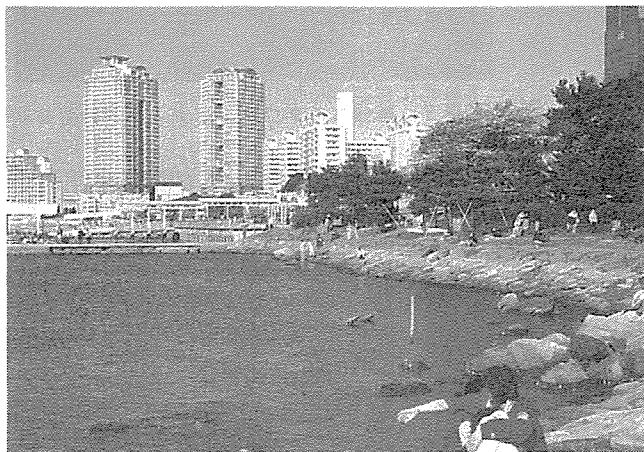


写真4 お台場海浜公園から高層住宅街を見る

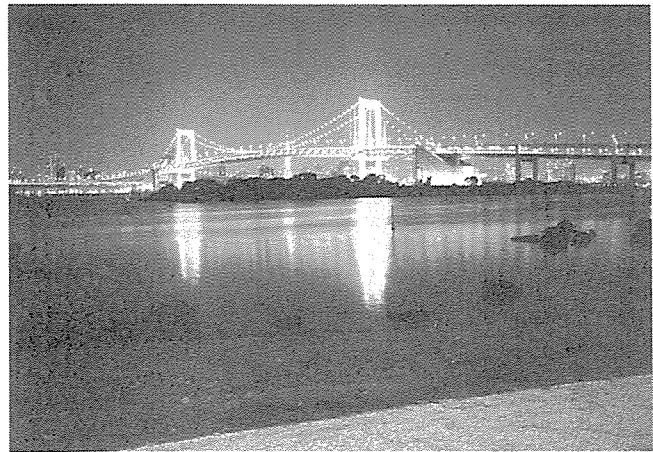
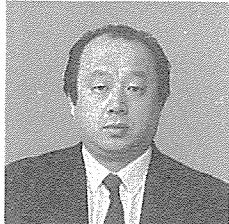


写真5 お台場海浜公園から夜の都心方面を望む

## 臨海副都心の ウォーターフロント開発

横内 憲久  
YOKOUCHI NORIHISA

日本大学理工学部  
海洋建築工学科



### 臨海副都心のウォーターフロント開発

1 ウォーターフロント開発としての「DEC KS～台場地域」20余年前からであろうか、都市のウォーターフロントは、アメニティ資源であり、アーバンリゾートの有力な候補地であり、硬直化した都市構造を振り動かす空間であるとも筆者は言ってきた。その確信的ともいえる根拠は、都市論や社会経済論などといった論理的な展開の結果ではなく、主に北米各地で顕現したいわゆるウォーターフロント開発を目の当たりにしたからである。つまり、現地・現物から直接語りかけられたメッセージがそう言わしめたのであろうと思っている。

現地からのメッセージは訪れるたびに、時を経るたびに新たなものが加わるということは、読者諸氏も経験済みであろう。したがって、あるプロジェクト等の評価をいつの時点で行うかはきわめて重要な問題である。とくに、都市開発等は一を聞いて十を知るとはなかなかいかない。

その点からいえば、本特集テーマである「臨海副都心」の評価は時期尚早といわざるを得ないが、現時点で語りかけられたものが何であるかも興味深い。そこで、さすがに臨海副都心の全域については筆者には荷が重すぎるの、ここでは最も人気が有るといわれているスポットのひとつであり、ウォーターフロント開発と呼ぶに相応しい「DEC KS～台場地域」（以降、台場地域）に限ってそのメッセージを聞いてみたい。

台場地域は、ゆりかもめの「台場駅」と隣の「お台場海浜公園駅」の周辺一体を指し、副都心中でも、すでに商業（DEC KS、ホテル）、業務、住居、公園（お台場海浜公園、人工砂浜）、交通（ゆりかもめ、海上バス）と複合的に機能が集積している。

ここからの景観は、対岸の芝浦ふ頭から品川ふ頭までの大きな囲繞水域の中に、お台場によってコの字型に囲繞された小さな水域が含まれ、この両者の存在によって、一般に地として認識される水域が、時として図としての意味も持ち出して心地好い反転が楽しめる。

さらに、斜めからのレインボーブリッジ、ふ頭上の港湾施設群、その背後の建築群によって都心ならではの動的なウォーターフロントの景観となっている。

ここを訪れて、東京のウォーターフロント開発もここまできたかが偽ざる心境であった。

これまでボルティモアを、ボストンを、ドックランズ等々を見続けてきたが、これらはあくまでわが国のウォーターフロント開発のための下敷（参考、評価等の材料）であり、ようやくこれらと比肩する空間が現われたことは、ウォーターフロント開発の重要性を標榜してきたもののひとりとしては望むべきことである。

2 ウォーターフロント開発の環境デザインさて、評価であるが、評価にあたってはふるいともいうべき概念を通して行ってみたい。

筆者はこれまでウォーターフロント開発を計画、また、事例等を評価する際に、そのプロジェクトが「水辺の開放」「背後地域との連続性」「自然への憧憬」の3つの概念を達成しているかを大きな留意点としてきた。そこで、これらの点から台場地域の環境デザインをみてみるとこととする。

#### (1) 水辺の開放

水辺の開放とは、原則として誰でもが水辺

（汀線・護岸付近）に容易に近づけることである。近づくとは、人々が直接水辺を体験する物理的接近と、景観などによって水辺を感じる視覚的接近も含まれる。

ゆりかもめを下車して、そのまま地上2、3階程度のペデストリアンデッキを伝わっていくと、水辺沿いのほぼすべての建物群に吸収され、広大な水域や都市群を一望できる場に出でてきる。水辺や水域への視覚的開放度・接近性は抜群であり、DEC KSやワンザ有明などの商業スペースが若者の圧倒的人気を得ているのは分かる気がする。オープンエアとなっている中空のからの俯観景観は、これまで無かった未体験な空間からの景観なのである。

一方、地表面からの水辺へのアクセスはといえば、これがめっぽう近づきにくい。地理に不案内ということもあるが、水際線に垂直な道路はほとんど海を感じさせず、きわめて分かりにくい。街区割りもスーパークロスでヒーマンスケールとは言い難く、明らかに自動車のための街区スケールである。また、建物や駅から砂浜へのアクセスは、海岸線沿いに道路があるためもあるが、主に2、3階レベルから空中歩廊によっている。とにかく、上部の豊かさに比べ、地表面はあまりに貧し過ぎる。

つまり、台場地域（臨海副都心といつてもよいが）の活動拠点はもっぱら中空であり、随筆家の青木玉氏が臨海副都心を「中空というか不思議な空間である。今まで自分の身につけていた尺度がナシになった気がする」（朝日新聞96.9.22）と述べるのもうなずける。

ボストンやニューヨーク、ニース・カンヌの例を出すまでもなく、まさに地に付いたグランドレベルの高まりは地域全体を活性化させる。それゆえ、俯観の多用はあまりにも気になるのである。お台場海浜公園駅脇のお台場に向かう、道路沿いの低層部のレストラン群や歩道に面するテラスに人気が高いのは単なる偶然とは思えない。

#### (2) 背後地域との連続性

周知のように、ウォーターフロントは都市の中で切り取られた特別の空間ではなく、都市を構成する一地域に過ぎない。したがって、いかに背後地域と有機的に連続性（コンテクスト）を有しているかは重要な課題である。

それは、土地利用、文化・歴史や、前述した視覚的アクセスを含めたアクセシビリティなどに関わってくる。

臨海副都心などの埋立地の開発は、いわば白地のキャンバスに一斉に好きな絵を描くようなものである。デザインを規定したり、抑制するような文化・歴史の核や継承すべき事物もない。しかし、新規の埋立地にそれを求めるのは無いものねだりに等しい。いま考えなければならないことは、いずれこの臨海副都心も30年、50年と歴史が付いてくる。その時に、各地域が有機的な連続性を有しているか、臨海副都心文化といったものが形成されるのか、ということである。たとえば、都市の楽しさのひとつに彷徨（さまよう）がある。いまふうにいえばタウンウォッティングであろうか。タウンウォッティングには、さまよう適した空間とウォッティングの対象が必要になる。それが、有機的な連続性と文化・歴史なのであろう。

いま臨海副都心あるのは、それぞれに工夫を凝らした自律する建物群であり、それもボツリボツリであり、背後地域との連続性を語



写真1 DECKSからの雄大な俯瞰景観



写真2 魅力に乏しい海岸線の空間



写真3 海・自然の雰囲気が感じられる台場砂浜

るにはいかにも早過ぎるが、このままでいけば、30年先に入々が彷徨できる空間が出現するとは想像しにくい。

### (3) 自然への憧憬

ウォーターフロントがその魅力を最も発揮するのが、海・川といった自然との触れ合いであろう。触れ合いには、水との直接的触れ合い、水の流れや水面反射などの間接的触れ合い、動植物等の生息・成育・季節を感じるなど自然への憧憬（あこがれ）まで含められる。

台場地域が臨海副都心の中で他の地域より、はるかに多くの人々を集めているのは、まさにこの自然との接触が卓越しているからにはほかならない。もちろん、その多くは人工砂浜（お台場公園）がもたらしたものである。台場付近からDECKS前にかけ湾曲した汀線（一部不自然な部分が気になるが）は、自然への憧憬の具象化であるといつても過言ではなかろう。さらにいえば、汀線の収束する台場は、その豊かな量の緑によって天然の岬（自

然海岸は岬によって汀線が収束する）にも見立てられ、より自然しさを醸し出している（台場を保存した関係者の見識に敬意を表したい）。

今後、前述した臨海副都心文化ともいうべきものが育まれるとすれば、この海浜が核となるのではと思われるがどうであろうか。

### 3 今後に向けて

冒頭で述べたとおり、臨海副都心の現時点での評価は難しかった。評価すべき点、批判すべき点があっても、過渡期というフィルターに通すとすべてが曖昧になってしまいかねない。しかし、過渡期だからこそ、今なら間に合う（間に合いそう）ということもある。

前述したように、中空の不安定さなどは、どうシミュレーションしても実空間の体験なしには感じ得ないものであり、実現されたからこそ分かったことであろう。地表面が環境デザインの基準になることを、現場はメッセージとして語りかけていたことは大きな収穫であった。

## ■研修研究委員会

岸井 隆幸

TAKAYUKI KISHII

研修研究委員会担当代表幹事

日本大学

### 1) 都市環境デザイン特別講習会の報告

9月11日～13日、都市づくりパブリックデザインセンター(UDC)会議室において自治体職員向けの都市環境デザイン特別講習会を開催しました。(UDCとの共催事業)昨年に引き続く2回目の試みですが、今回は一般企業からの参加も受け入れ総勢18名となりました。単に話を聞いてスライドを見る研修から脱皮しようと3日間の設計演習を中心に据えたプログラムとしており、今回は宮城俊作氏、中野恒明氏、加藤源氏、高見公雄氏に講師をお願いしました。参加者にも好評ですので来年も開催したいと思います。

お知り合いの自治体にも是非お勧め下さい。

### 2) 第3回都市環境デザインセミナーの報告

9月20日、東京・世田谷美術館において会員を主たる対象とした都市環境デザインセミナー(第3回)を開催しました。(同美術館との共催事業)今回は第1回の大谷先生、第2回の槇先生に続く建築家シリーズの最後として内井昭蔵先生をおまねきし、「マスターーアーキテクトの取り組み」を中心

にお話をうかがいました。平日の午後であったにも関わらず約80名の参加者がおり、建築家の共同作業をどのようにコーディネイトするか等熱心な討議が行われました。今回で一応建築家シリーズが終わりましたので、次回からは違う分野の方をおまねきして続けたいと思います。

会員、協力法人の方は無料となっていますのでこれからも奮って御参加下さい。

### 3) 学生向けセミナー開催地の希望を募ります。

昨年は東京大学において、今年は6月29日に早稲田大学において学生向けのセミナーを開催しました。様々な分野のJUDI会員がそれぞれの活動・体験について話をする企画ですが、若いうちに違う分野の話を聞くことは学生にとって極めて有用であると思いますし、21世紀を担う新しい優れた都市環境デザイナーを育ててゆくことはJUDI活動としても非常に重要であると思います。

来年(春)の開催学校を募りたいと思いますのでご希望があれば事務局までご連絡下さい。

## ■ ブロック例会レポート

### ■ 北海道ブロック

山崎 正弘

MASAHIRO YAMAZAKI

北海道ブロック幹事

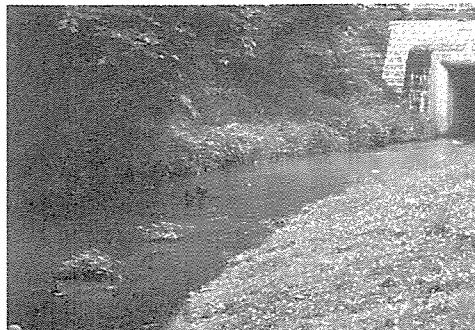
(株) HAU計画設計

#### 精進川ウォッティング

- ・7月27日 JUDI会員で川の再生事業にも詳しい武山氏の案内で精進川を下流から上流に向って散歩した。(参加者は会員以外の方も含めて10人) 精進川は「ふるさとの川づくり事業」で再生した小川で、概要は次のとおりである。
- ・精進川(しょうじんがわ)
  - ・そもそもは札幌の母なる川、豊平川が蛇行してできた小さな流れだったが市の発展と共に周辺や、豊平川との間も市街化し、独立した川のような形になった。
  - ・1971年～1976年の整備事業で、積み石護岸の単断面の川として味化なく改修され、人々の生活と切り放された。
  - ・今回の再生事業対象区間は3.5km、流域は1.6km<sup>2</sup>、「河畔林の保全と再生」「生態系の復活」「景観の改善」「親水性の向上」「隣地との一体化」など、5つの整備目標をあげている。
  - ・3.5kmの長さを流速や川の広がりなどに合わせ「自然とのふれあい」「たたずむ水辺」「水辺とのふれあい」「自然のはぐくみ」の4区間に分けて計画してある
  - ・現在、キツツキ・カラなどの野鳥がもどり、



北海道が売却した敷地の一部と参加者



標準的な風景(鉄柱が気になる)





橋の一部が階段になった幌平橋

#### 9月・10月の活動予定

9月15日：札幌のローカルFM放送カラスでJUDI会員の武山、酒本、辻井の3氏がJUDIが取り組むまちづくりなどについて、市民とのワークショップを通してまちづくりを進めていくための呼びかけのひとつとして、こうし

たローカル放送の活用は有効だと思う。  
10月8日：まちの中の照明のあり方について活動している照明探偵団の方を招いて語り合う。会員以外の方々にも広く呼びかけ50名程の集まりを予定している。

10月18日：デンマーク王立美術アカデミー建築学科教授であるヤン・ゲール氏の「都市における人間的質の創造をめざして—屋外空間の生活とデザイン—」講演会を日本建築学会北海道支部が主催、JUDI北海道ブロックが共催する。

(予定人員80名)

これらについては次回のJUDIニュースなどで結果報告を予定している。9月の北海道は道南地方では秋の香りがただよい、道東地方では冷夏の影響による不作の心配をしながら秋の収穫の準備をし、道北ではそろそろ冬の足音がしおび寄っている。

フォーラムの開催にあたり、全国から80編を越える提案とスライドをお寄せいただきました。ご協力を感謝いたします。皆さまからの提案は、「キーワード集」として小冊子に編集中です。また、スライドもビデオにまとめてナレーションをつけ、フォーラム関連企画の「ビジュアルプレゼンテーション（難波、梅田の2会場）」で公開する予定です。

参加ご希望の方は、下記までお申し込み下さい。  
都市環境デザイン会議・フォーラム実行委員会  
FAX 06-946-9747 (都市環境計画研究所 大矢)

#### 「'96 都市環境デザインセミナー・関西」

下期は震災のテーマからはなれて、9月に2回開催しました。

第7回 都市環境デザインの10年を振り返り将来を展望する（大阪 9月7日）

第8回 シークエンスによる都市環境の動的知覚とデザイン（京都 9月28日）

各回とも関西以外の会員も迎えて盛況でした。

第9回以降のテーマは未定ですが、決定次第インターネットのホームページに掲載します。（<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/judi/index.htm>）

の思いを自由に話し合う研究報告会を昨年の9月30日と翌10月1日の2日間にわたって実施した。参加者11名（当時の非会員1名を含む）による討議は、九州ブロック活動の独自性と今後の活動内容等について自由な意見交換の場として深夜まで活発に行われた。研究報告会は初めての試みではあったが、今後継続的な事業として行くこととなった。

#### 2 別府市での公開シンポジウムの開催

恒例となった年に1回の公開シンポジウムに先立ち、ブロック総会、懇親パーティ、見学会を2日に分けて実施した。それぞれの概要は次のようなものである。

## ■関西ブロック

土橋 正彦

TSUCHIHASHI MASAHICO  
関西ブロック幹事

(株)アーバンスタディ研究所

## ■九州ブロック

大久保 裕文

HIROFUMI OHKUBO  
九州ブロック幹事

(有)大久保計画アトリエ

#### 「第5回 都市環境デザインフォーラム・関西」

前号でお知らせした都心居住の環境デザイン（住み合ったのしみ・行き合うあやしさ）をテーマにしたフォーラムのプログラムが下記のように確定しました。全国の皆さまの参加を歓迎します。

-----  
96.11.01 (金) 9:50~17:00

大阪・天王寺 一心寺シアター

基調講演=「手のひらに載る都市—ヒマラヤ山岳部に見る都市の原型」佐々木幹郎

課題解説=「都心居住をめぐって」鳴海邦碩

3つの問題提起=

- 「混じり合い住み合う・都心環境」田端修、
- 「都心住宅のかたち・過去と未来」佐藤健正、
- 「動詞都市としての環境デザイン」佐々木葉二

ビジュアル・プレゼンテーション=

都心居住の環境デザイン

パネルディスカッション=

都心居住の環境デザインをめぐって

コーディネーター 小浦久子

パネリスト 高口恭行、安原 秀、岩本康夫、

伊野瀬久美恵、加茂みどり

全体講評 土井幸平

九州ブロックでは、これまで活動主旨のPRと会員の研修を目的として各種の事業活動を福岡、佐賀、大分県の各主要都市で展開してきた。特に、公開シンポジウムは、九州ブロックの主要事業としてこれまで福岡市、北九州市、佐賀市そして今春5月には別府市で開催した。また、昨年の秋には、熊本県南小国長の黒川温泉で初の会員のみによる研究報告会を実施し、会員相互の親睦と研修を行った。以下、公開シンポジウムを中心にブロック活動と今後の方向について報告したい。

#### 1 研究報告会の開催

都市環境デザインに関する学習と研修を目的として会員相互の業務の紹介や都市環境デザインへ

## 【報告者】

玉田 孝二

(株)都市環境研究所九州事務所

棚町 修一

(株)ゼン環境設計

### 1) ブロック総会

5月18日（土）午後3半より別府市のフレックス會議室においてブロック総会が岡ブロック幹事の進行で開催された。まず、今年度（1996年）からの新幹事に大久保氏が推薦された経緯が事務局から報告され、次いで第5期（1995年）ブロック活動報告と第6期（1996年）活動計画（案）が提出された。第6期の公開シンポジウム（1997年5月予定）は、会員の少ない県やいない県での開催には困難性が伴うことと、過去5回の開催の総括を兼ねて第1回目の開催地である福岡市で行うこと等、議案書の通り可決された。

### 2) 懇親会パーティ

ブロック総会の後、夕刻の6時から別府市をはじめ「町並みとまちづくりを考える県民の会」や大分県建築士会、建築士事務所協会、建設業協会別府支部等の方々40人を交えて懇親パーティが開催された。別府市長からは、別府は「昼の顔」と「夜の顔」を持つ街であり、専門家による多彩な都市環境デザインを提案してもらいたいとの激励を戴いた。また地元の大学、各種団体の方々からは、別府市をかたどる「山と海」、別府市を創った「地の人、外の人」などの話題を戴き、有意義で楽しい懇親の場が設けられた。その後、古き良き時代の別府を偲ばせる場で、別府の街の昔と今と未来を夜遅くまで語り合った。

### 3) 見学会

翌19日（日）の午前中は、3時間の行程で別府市内の歴史的な遺産や主要プロジェクト等の見学会を実施した。別府駅を午前9時半に出発し、人工海浜であるSPAビーチ、別府タワーからの市内の俯瞰、往時の別府を彷彿させる砂湯のある木造の竹瓦温泉の見学を行った。その後、近年の話題となっている磯崎新氏設計のビーコンプラザに立ち寄った。また、昔ながらの町並みのある地区を通って、別府の代表的な温泉街である鉄輪温泉を

見学し、障害者の職場と居住の併設が行われている「太陽の家」を見せて戴いた。最後は、海に開かれた瀟洒な茶室を持つ旧別荘（現在は民間企業の保養所）を見学し、午後からのシンポジウム会場に向かった。尚、この見学会では終始、地元の写真家の方と役所の方に案内して戴いた。

### 4) 公開シンポジウム

午後2時から、市内の豊泉荘において一般の市民や専門家等、60名を越える方々を交えて「癒（いや）しのデザイン」と題したシンポジウムが開催された。司会進行は、当ブロックの会員で大分県宇佐市在住の山内英生氏によって行われた。初めに「町並みとまちづくりを考える県民の会」代表の村松幸彦氏による「別府市の成り立ちと歴史的な土壤」では、昭和初期の個性ある人とたたずまいの風情が別府の原点であるとする基調講演があった。これに引き続いて、地元在住の写真家、藤田洋三氏が「写真家の眼に写る湯の街・別府」と題して、明治以降の都市づくりの経緯を石炭エネルギーと関連づけて紹介しながら、かっての町並みのすばらしさを紹介した。地元の中村光氏は、「別府の裏通りと表通り」について、一市民から見た別府の持つ多様さや魅力を紹介しながら、大分や湯布院との関係の中で別府の現状を報告した。当ブロック会員の中村享一氏は「別府の歴史、自然と観光」と題して、古い絵図や古地図を引用した他都市との比較で見た別府の自然、歴史、観光及び温泉などの特徴について意見を述べ、都市デザインの今日的な課題を主に発表した。最後に、大分大学工学部の佐藤誠治氏が「ベイエリア21世紀を考える」と題して都市の課題や事業及び構想を紹介しながら、21世紀に向けた別府市のあるべき都市像の提案を行った。これらの発表を受け、引き続きブロック幹事の岡道也氏のコーディネーターでパネラーによる討論が行われた。討論のきっかけは、昭和初期の「世界の別府」と言う意識を



ブロック総会



見学会



懇親会パーティの風景



公開シンポジウム

探ることから始まり、よそ者が別府のまちづくりに大きな役割を担い、個性的な街をつくりあげることに関わったこと、建設を通じて中央と地元との技術者の交流があり、様々な地域との交流もあったこと等が紹介された。別府の将来については、これまでの観光と保養には都市としての魅力に限界があり、身も心も癒す街にふさわしい周辺関連産業の育成や住機能の充実による居住環境整備の必要性あるいは歴史的な建築物のストックの見直し等これまでにない新しい都市の秩序を構築していくことが論議された。さらに、別府の今後の都市景観づくりについて、別府は、10km四方に1,500mの高低差を有する地理的な環境を持っていることが自然の景観特性であることが述べられた。会場の当会のメンバーからは、現状の都市構造にのみ頼ることなく歴史的、地理的なヒューマンなスケールからの街の再発見が重要であることや温泉地の団体利用から、個人来街者へのきめの細かい対応が必要な時代であるとの考えから別荘の開放によるレストラン等への再生や別荘が有する歴史的な資産の公開等も考えると懐の深い街になるなど癒しのデザインにふさわしい意見が出され、時間超過の熱気のある公開シンポジウムは無事閉幕した。

### 3 今後の方向

今年の6月から、ブロック幹事が岡道也氏から大久保裕文氏に交代した。これまでの5ヶ月は九州ブロック活動の草創期の感があり、岡幹事の苦労には敬意を払いたい。新幹事においては、これまでの主要事業である公開シンポジウムの開催や研究報告会の実施に加え「九州都市デザインガイドマップ」の発刊準備、定期的なブロックニュースの発刊等かなりの重責を負うこととなったと思えるが、ブロック会員各位の相互理解と協力があってこそ可能であることが、9月のブロック会議の決議事項であった。今後も、都市環境デザインの幅広い理解のための活動をブロックが一団となって推進する方向付けが示された。



公開シンポジウムのパネラーの発言風景

### 1. 新会員の紹介

1996年7月1日～8月31日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

8月31日現在の会員数は、487名です。

氏名	勤務先
奥 史子	コピス CGスタジオ
富田 泰行	トミタ・ライティング・デザイン・オフィス
東海林弘靖	(株) ライティング・アソシエーツ
小泉 普	(株) 日本海コンサルタント
安田 裕治	安田設計室+総合計画
佐藤 和裕	(株) 森俊偉+ARCO建築・計画事務所
笹山 聰入	(株) I N A X 建材事業本部
平野 祐一	平野地域計画
横井 紘一	(株) エー・ティ・エー
中島 秋平	(有) 中島造景事務所

### 2. 住所変更等（敬称略）

氏名	変更内容(新)
佐々木葉二	鳳コンサルタント(株) 〒542 大阪市中央区南船場3-10-10 Tel.06-258-7155 Fax.06-258-7156
田中 直子	サウンドスケープ研究機構 〒150 東京都渋谷区神宮前5-15-9 Tel.03-3486-7386 Fax.03-3486-7384
田畠 貞寿	〒180 東京都武蔵野市関前1-2-27 Tel.0422-37-5388 Fax.0422-37-5337
鳥越けい子	サウンドスケープ研究機構 〒150 東京都渋谷区神宮前5-15-9 Tel.03-3486-7386 Fax.03-3486-7384
由井 大介	(株) 復建エンジニヤリング 〒980 仙台市青葉区木町通1-6-34 仙台安藤ビル Tel & Faxは変更無し

## 事務局より

## 編集後記

臨海副都心の環境デザインを取り上げるのはやや早すぎたかも知れないが、あれだけ多くの人々が訪れ、それぞれの驚きの目で眺めている今、この状況をJUDIとして無視するわけにもいかないであろうと思い、特集のテーマとした次第である。

今回は、紹介の意味も込めて、東京都及び臨海副都心の環境デザインに直接かかわった方々（西澤氏、高澤氏、小林氏、中野氏）に多く登場してもらったが、何時からもっと多くのJUDIのメンバーの意見、感想を紹介したいと思っている。

なお、執筆者には、「開発自体の是非は問わずに」という条件付きでお願いしてあることをお断りします。（沢木俊問）

### 広報・出版委員会

土田 旭	松村みち子
沢木 俊問	伊藤 光造
近田 玲子	小林 郁雄
菅 孝能	清水 泰博
中島 猛夫	河本 一行
櫻井 淳	森川 稔
作山 康	